

International Observership in HBP Surgery に参加して

熊本大学消化器外科学
増田稔郎



私は、日本肝胆膵外科学会 International Observership の第 10 期生として、2015 年 7 月から 2017 年 4 月まで、1 年 9 か月のアメリカ留学を経験させていただきました。これまでの main host であった St. Luke's Health System の Dr. Traverso が退任され、Mayo clinic の Dr. Kendrick、UCLA medical center の Dr. Donahue、Johns Hopkins の Dr. Wolfgang という、それぞれ新しい host doctors のもとで研修させていただきました。

1. Mayo clinic (Minnesota 州 Rochester)

Mayo clinic には 1 年間留学させていただきました。Minnesota 州はアメリカの冷蔵庫と呼ばれるほど寒い場所で、冬は-20~-30℃になることもあります。Rochester の Mayo clinic に留学または勤務している日本人は多く、「Mayo 日本人会」でお互いに交流があります。私は子供 3 人を含む家族 5 人で留学したということもあり、Mayo 日本人会の皆さんには家族ともども大変お世話になりました。

Mayo clinic では Research fellow の立場で研修させていただきました。「Laparoscopic pancreatotomy の安全性・有用性」と「大腸癌肝転移に対する RFA」について臨床研究をさせていただきました。また、月曜早朝と夕方のカンファレンス、火曜早朝の Journal club、火曜、金曜昼食時の tumor board に参加しました。Research fellow は文字通り臨床リサーチだけを行う立場で、通常手術室への立ち入りはできないのですが、Dr. Kendrick の心遣いで、何度か laparoscopic Whipple を見学させていただくことができました。膵空腸吻合の duct to mucosa を含む全ての手技を腹腔鏡で行っており、特に腹腔鏡下での持針器の把持、運針などの確実さとスピードに非常に感銘を受けました。膵空腸吻合の duct to mucosa は日本の開腹手術では 8 針以上縫合することが多いと思いますが、Dr. Kendrick の laparoscopic Whipple では 4 針縫合するのみで、面白いと思いました。

2. UCLA medical center (California 州 Los Angeles)

Mayo clinic から UCLA medical center へは、家族 5 人で 1 週間かけて車で移動しました。途中、Mount Rushmore national park、Badlands national park、Devils Tower national park、Yellowstone national park、Las Vegas などの観光地を楽しみました。非常に大変な思いをしましたが、私たちの家族にとって一生の思い出となりました。

Los Angeles は世界的に有名な都市で、Hollywood や Beverly Hills など見どころ満載です。一年中温暖で快晴の日が多く過ごしやすい気候ですが、人、車が多く、交通渋滞は聞きしに勝るものでした。移民が多く、日本人や韓国人などのアジア人も多いため日本食の食材が豊富です。

UCLA は University of California, Los Angeles の略で、そのキャンパスは青い空、緑の芝生に茶色のレンガの建物が大変美しいです。スポーツも非常に盛んで、キャンパスは若者の活気に溢れています。私は、UCLA に 6 か月間滞在し、Ronald Regan UCLA Medical Center で、主に Dr. Donahue の Whipple を中心に見学させていただきました。UCLA の膵空腸吻合は嵌入法の形で、アウターレイヤーを 3-0 絹糸の結節縫合、インナーレイヤーを 3-0 PDS の連続縫合で吻合していました。水曜早朝の Grand Round、火曜日昼食時の膵疾患カンファレンスに参加し、火曜日午後には外来の見学もさせていただきました。外来は、ナースプラクティショナーやレジデントが患者情報を把握、提示して、スタッフ医師が患者さんの待つ診察室を訪問する形で、日本と違うシステムが面白いと感じました。診察やインフォームドコンセントの際、医師と患者さんやご家族が何度も握手やハグをするのが印象的で、このようにして信頼関係を築いているのだと感じました。リサーチでは、「膵癌のリンパ節転移」、「膵癌と術前画像」について臨床研究させていただきました。

3. Johns Hopkins University (Maryland 州 Baltimore)

UCLA から Johns Hopkins への J1 ビザの移行がうまくいかなかったため、私は、日本に一時帰国して B1 ビザを取得しなおした後、Johns Hopkins に移動しました。Baltimore は治安が悪いと聞いていたことと、B1 ビザでの Johns Hopkins の滞在は 3 か月以内の短期に限られたため、妻と子供 3 人は Los Angeles に残し、Johns Hopkins へは単身赴任しました。Baltimore、とくに Johns Hopkins の周辺は治安が悪いことで有名で、Johns Hopkins の周辺は道路の交差点ごとに警官が常駐しています。Baltimore の主要な空港、駅、観光地などは安全です。Baltimore は地理的に New York や Washington D.C. に近く、電車で日帰り旅行することができます。

Johns Hopkins では Dr. Wolfgang の Whipple、Dr. Weiss の肝切除、Dr. He の robotic surgery など、いろいろな手術を見学させていただきました。御年 80 歳代の Dr. Cameron がレジデントを相手に Whipple などの膵手術を執刀される所も見学することができました。Grand Round や肝・膵のカンファレンスなど週 7 つものミーティングに参加させていただきました。リサーチでは、大腸癌肝転移のデータベースをもとに、熊本大学消化器外科学とのコラボレーションの形で「大腸癌肝転移に対する肝切除+RFA」と、「大腸癌肝転移の肝切除術前ベバシズマブの効果」のテーマで臨床研究させていただきました。3 か月弱の短い期間でしたが、大変有意義な研修をさせていただくことができました。

まとめ

2015 年から 2017 年まで、本留学制度に参加させていただき、全体として感じたことは、Dr. Traverso など、本制度初期からの host doctors が引退され、すべて新しい host doctors になったことで、現在、当初のような厳しい教育システムはないということです。毎日の duty などは全くありませんし、手術見学、リサーチ、カンファレンスの参加などすべて自由です。それだけに、私は毎朝早く出勤し、カンファレンスにはできるだけ多く参加し、手術場の受付の人やナースと仲良くなって手術室に出入りしました。論文もできるだけ作成しましたが、host doctors に校閲いただくメールのやりとりに時間がかかり、いまだに苦戦しています。

英会話も本当に苦労しました。特にヒアリングができなければ会話どころではなく、カンファレンスや Grand Round に参加しても全くついていけません。これではいけないとスカイプ英会話を始め、留学

中は毎朝早朝にレッスンを受けてました。レジデント、学生や子供の友達の親など、できるだけいろいろな人といろいろな会話をするようにもしました。英会話の勉強は、楽しい趣味として一生続けていきたいと思っています。

私は 2017 年 4 月末に単身で日本に帰国しました。現在 13 歳、9 歳、6 歳の子供たちを今年の school year の最後までアメリカの学校に通わせるため、妻と子供たちは、今年 7 月末までの予定で現在も Los Angeles に滞在しています。本留学制度に参加させていただいたことで、自分にはもちろんのこと、妻や子供たちにとっても、アメリカ留学・アメリカ国内移動という、他ではできない素晴らしい経験をさせていただきました。本留学制度を創設された高田教授、川原田教授、羽生教授、大変お世話になった国際交流委員会理事の佐野教授、江口教授、いろいろと助けてくださった歴代留学生の先生方や日本肝胆膵外科学会事務局の皆様、日本肝胆膵外科学会員の先生方に心から感謝申し上げます。本留学制度で学んだことを生かして、これからも日本国内外の学会で発表し、英文論文報告を続け、日本の医療、地域の医療に少しでも役立てるよう、頑張りたいと思います。



Dr. Kendrick のお宅にて

Dr. Kendrick 夫妻とお孫さん 2 人、うちの子供たち 3 人、熊本労災病院の富安先生と



Dr. Farnell のオフィスにて



Dr. Donahue (左)、Dr. Girgis (右) と



Dr. Reber のオフィスにて



Dr. Reber のお宅にて

Dr. Reber、Dr. Donahue、熊本大学の馬場教授、宮本先生、宮田先生と



手術室にて Dr. Wolfgang と



手術室にて Dr. Weiss と